

火星



平成17年7月号

七曜抄 二

山尾玉藻

鰐口の下がりゐる辺の入梅かな

吞舟さんへ

ことづてをぬかるでないぞ青蛙

鱒鮓の近江も奥に落ち合ひぬ

でで虫の渦の緊まれる月夜かな

暑がりぬ葵の紋を仰ぎつつ
葎倉をめぐる男の扇かな
大叔母の顔して寄り来海月なり
夕風に胡瓜の曲る国分尼寺
松の間に搔氷屋の背のありし
三伏や水の底なる穴いくつ

太白星

柳生千枝子

夏が来る豪雨ひととき荒れて過ぎ
朝曇つつじの白が未だ残る
保母優し青林檎剥く間も笑まひ
夏鴨の鏗声何を咎めぬる
氷菓舐めをり人生の暮近く
虹消えて汐騒の音よみがへる
清水掬ふてのひら白く映りをり

杉浦典子

赤貝を俎に打ち雨催
飯蛸や酒友といふがひとりゐる

草餅や子がふたりづつ子をつれ来
立つ歩く泳ぐペンギン花の昼
乗りに行こさくらの山の観覧車
春の雷大きな文字の封書来し
朝ざくら亀の沈みし濁りかな

浜口高子

雛燃やす煙の中にをりにけり
うぐひすや足湯場に足ほうりをり
二上山へ蔓の泳げる貝母かな
ビニール袋の春の土買ひにけり
葉桜の丹後や鱒風に干し
芹の根を溪の日ざしの滴れる
串刺しの八十八夜の魚の貌

火星作品 山尾玉藻選

旅終へて山のやうなる春炬燵 明石 戸栗末廣

春の蟬妻のくすりを買ひに出て

牡丹ざくら二重瞼になつてをり

空いまだ昼のいろなり山椿

春の地に描く臍臓のありどころ

鑑真の御目思へり田螺和 神戸 深澤 鱻

ぼつぺんに吹口八十八夜寒

春の夜の母に箸あるレストラン

沖にゐて陸静かなる花見かな

遊船の去にし海津の桜かな

金魚田も餌を撒く人も夕おぼろ 大和郡山 城 孝子

亀鳴くと若者の酌受けてゐし

杉咲くや模造真珠と本真珠

鬼瓦乾いてゐたる朝寝かな
燕きてふたりの顔の古びたり
白波の駄け登りたる黒^ろ海^め布^い岩^わ
銅鑼の音にきちんと豊む春日傘
燈台の陽うら陽おもて春疾風
海光のいちにちありし茎立菜
向き向きに桜吹雪のパイプ椅子
夕映を鋤き込んでゆく代田搔
菜の花やうしろ一輛切り離す
曼陀羅の日向に鳥の交むなり
糸遊や墓参の炎手囲ひす
じやがたらの花サイレンの鳴つてをり
花筏おのづ別るるときのあるり
淡海へ石山の花ふぶきけり
駅員はひとりなりけり山桜
開店のわつと積まれし春キャベツ
たんぽぽの絮とぶ中に停車せり

八幡
奥田順子

兵庫
田中英子

八幡
飯塚糸子

選のあとに

山尾 玉藻

るが、この違和感を覚える対比を見逃さず句にした手柄。

たんぼぼの絮とぶ中に停車せり

奥田 順子

「停車」したものが自動車でも構わないが、やはりローカル線の一、二輛編成の列車が良い。単線の場合、すれ違う列車を待つ為に暫らく駅に停車する事がある。外を眺めていた作者は、何も無いと思っていた中空に「たんぼぼの絮」が飛ぶのが見えてきたのだ。中七下五の表現は的確である。

なんとなくふたりづれなる夕桜

野澤 あき

特に花見と限定せずとも良い。十人足らずで出かけた帰り、桜並木の下を通ったのであろう。自ずと二人ずつ話しながら歩いている。「なんとなくふたりづれなる」が的を射ており、「夕桜」の季語も動かない。

花林檎また摘みこぼす指かな

藤原 冬人

じゃがいもと同様、林檎の花も摘花する。こちらの方は一つ一つの実が充分に育つよう、適量を摘花する。作者はやや遠くから見ていたのであろう、脚立の上で作業をしている人の手から時折花が零れている。美しい景である。

(以下略)

旅終へて山のやうなる春炬燵

戸栗 末廣

日常に対し、最たる非日常は旅であり、旅から帰り玄関に入るなり日常に引き戻されるのである。「春炬燵」は日常生活の象徴、現実生活に引き戻された思いが「山のやうなる」なのだ。

沖にゐて陸静かなる花見かな

深澤 鱈

奥琵琶の海津辺りが思い浮かぶ。距離の長い街道桜の為湖よりの花見船が出る。湖岸の花の下では宴会などをやっているのであろうが、船からは僅かばかり動く姿が見えるだけである。沖からの花見は俗世間を離れた異次元の花見である。

じゃがたらの花サイレンの鳴つてをり

田中 英子

じゃがいもを作る者にとつて栄養を吸収する花は余計もの。摘花しても次から次へと咲き続ける。花はピンクと白があり、見るものにとつては地味ながら非常に美しい。パトカーか救急車のサイレンが聞える何処にでもありそうな風景であ

恒星圈

松 たかし

壬生念仏黙を深しむ鉦の音
つつぬけに町家に響く壬生の鉦
見てゐては落ちぬ椿と悟りけり
送るものに陽炎立ちてをり
さくら餅優先座席空いてをり

深澤 鱧

山本 耀子

つれあひは白狐となれり春の月
大鯉の胴に木の芽のまぶせあり
単線のさくらの駅に円座かな
懐かしきひとみて花の峪深し
さくら見し湖北の舟に貝のひも

花時の象の乳房の淋しかり
羽根たたみ替へふくろふの目借り時
草青む洗礼受けし嬰重く
ご開帳椿象太子像のそば
紅枝垂一枝一枝の雨しづく

堀 志皋

吉田 島江

菜の花や一気に抜けし淡路島
負けさうなテトラポッドや磯菜摘
豌豆の白花ばかりなりしなり
ブルゾンの昨日付きたる杉花粉
亀鳴くや一錠増えし飲み菓

しらしらと波寄す岬鳥帰る
あまご見に宿下駄を借り傘を借り
ナナハンをとばす構へや亀の鳴く
種薯へ鴉が声を落しけり
夕さりの花のなごりや露天風呂

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

穴に入り穴掘る犬やクロツカス
亀鳴いてスリッパふたつづつ並ぶ
水際の鳥の足跡夕薄暑
子の家の特製カレー霾ぐもり

西畑敦子

露座仏の片身湿れる花の昼
紅白の突つ支ひ棒なる桜かな
種物屋の角を曲りて花の寺
みかん山の向ひの山の遅桜

加藤君子

行く雲と同じところに花の冷
問ひつめれば旅行だと言ふ春灯
一寸づつ社会からずれ春灯
花の冷余齡の吾に句友あり

南浦輝子

うみたての玉子あります山笑ふ
花杏村に一軒レストラン
鶯や姿捜せば遠のきぬ
飛びたちし水音激し春の鴨

長田暉子

木洩れ日を掬うて行くや黒揚羽
手に馴染む赤きシヨベルや豆の花
花柄のビニールの靴花の冷
百年の大黒柱若葉冷

波田美智子

退院の夫と見上ぐる夕桜
ハンゲル語で話す一団落花かな
ラーメンと大きく看板彼岸西風
娘を訪ふや川越え来る落花踏み

高松由利子

白蓮のあの谷へ行く道のなし
草餅を裏返したる狐いろ
春挽糸湖北に風の立つ日かな
菜の花やお召列車の動かざり